

現代の独言と源氏物語の口語訳

— 大学生を対象にした言語調査と、口語訳作品とから —

齋藤達哉

はじめに

小考は、中古和文の独言と、現代の独言との相違点を確認し、源氏物語の口語訳に資することを目的としている。

源氏物語を中心とする中古和文の独言については、齋藤(二〇〇三)において、言語生活に起因する特徴を指摘した。小考では、これを踏まえて、以下の三点について述べる。

- I、現代では、独言はどのように発話されているか、また、どのような言語行動と認識されているかについて、大学生を対象に行った調査の結果を分析する(第二―四節)。
- II、Iの結果と、中古和文(おもに源氏物語)とを比較し、共通点、相違点を確認する(第五節)。
- III、近現代における源氏物語の口語訳作品について、原典の「ヒトリゴツ」が、どのように口語訳されているかを調査

する。これにより、源氏物語の独言に対する、近現代での注意のはられ方を確認する(第六節)。

また、I―IIIを通じて、言語生活の違いを認識したうえでの口語訳についても考察する。

一、中古の独言と和歌・漢詩・催馬楽

源氏物語を中心とする中古和文の独言の特徴については、齋藤(二〇〇三)において、発話様式¹⁾の特徴と、その背景にある言語行動とについて調査し、次のことを指摘した。

- a、発話様式は「和歌の全体」あるいは「和歌の一部分」「漢詩・催馬楽の一部分」であることのほうが、「会話文」であることよりも多いという特徴が見られる。
- b、aの背景には、〈和歌を独詠すること〉〈和歌・漢詩・催馬

「楽の一部分を引用すること」という言語行動が、「あはれ」などと同等の間投的発話として行われていたということがある。

c、bの言語行動は、ヒトリゴツの持つ「返答を期待せずに発話する」、ヒトリゴトの持つ「返歌を期待しないかのよ
うな発話の音声面での消極性をあらわす」という性質と合致するために独言と結びつき、Iの特徴が見られる。

aのうち、発話様式が「和歌の全体」と認められる用例は、次のようなものである。

(1)〔源氏〕見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな

とひとりごち給へど、えさしいらへも聞こえず。(夕顔・新大系第一巻・一四二頁・一〇行目)^③

同じくaの、発話様式が「和歌の一部分」と認められる例は、次のようなものである。

(2)〔源氏〕「ことしばかりは」とひとりごち給て、人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠り給て、(薄雲・二・二三二・九)

これは、「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」(古今集・哀傷・上野岑雄)の一部分を引用したものと解釈されている発話である。

また、aのうち、発話様式が「漢詩・催馬楽の一部分」と認

められる例は、次のようなものである。

(3)涙もあらそふ心ちして、〔源氏〕「雨となり雲とや成にけん、いまは知らず」とうちひとりごちて、頬杖つき給へる御さま…(葵・一・三二八・七)

(4)〔夕霧〕「妹と我といささの山の」と、声はいとおかしうて、ひとりごち歌ひて、(横笛・四・五七・一〇)

右の(3)は、漢詩の一節「相逢うも相笑ふも尽く夢の如し雨となり雲とやなりにけむ今は知らず」(劉夢得外集・有所嗟・劉禹錫)を、(4)は、催馬楽「妹と我と いるさの山の 山あららぎ 手な取り触れそ や かほまさるがに や とくまさるがに や」(妹と我)の一節を引用した発話である。

現代の日常の言語行動において、このような発話様式での独言を行うことは、稀有であろう。

二、現代語における常套句化と衰退

では、現代語における「独言の発話をあらわす語」の使用実態は、どのようになっているのであろうか。大学生を対象に、〈独言の発話をあらわす語を含む短文を自由作文する〉という調査を行った。回答人数は一八五名で、一人あたり複数の短文を作成する形式をとったので、三八七例の短文が収集できた。

ここで得られた短文では、次のように、名詞の形の「ヒトリ

るといふ調査を行った。質問は、〈ヒトリゴトという語の意味について、国語辞典のように解説をしてください〉というもので、回答人数は前回と同じ一八五名であった。

回答を内容別に分類したうえで、多い順に並べると次のようになる（一人の記述のなかに複数の語義が見られる場合もある。したがって、総計は一八五よりも多い）。

- 1、聞き手を想定しないで話す・一人で言う 一三八箇所
- 2、無意識に話す 四一箇所
- 3、聞き手がいても結果として会話が不成立 一二箇所
- 4、小さい声量で話す 一一箇所
- 5、無生物に向かつて話す 六箇所
- 6、意識的に話す 四箇所

〈聞き手を想定しないで話す・一人で言う〉が最も多く（七四・六％）に見られ、それ以外は、二位の〈無意識に話す〉（二二・二％）でも急に数を減らしている。このことから、七割以上が、ヒトリゴトを「聞き手を想定せずに、一人で発話すること」だと考えていることが知られる。

四、現代の独言の言語イメージ

さて、ここでは、第二節で見た大学生の短文を、以下の（a）（c）の三つの観点から整理する。

（a）独言が発話される場面

独言が発話される場面が読みとれるものは、一二七例が認められる。これを、場面ごとに分類したうえで、多い順に並べると次のようになる。

- 1、無意識のとき・集中しているとき 三〇例
- 2、孤独な場・私的な場 二九例
- 3、何か動作をしながら 二三例
- 4、無生物に向かつて 二一例
- 5、公共の場 一四例
- 6、会話が不成立 六例
- 7、悲しく苦しいとき 四例

一位の分類のうちの〈集中しているとき〉と三位の〈何か動作をしながら〉とは、独言を論理的な思考の手段のひとつとしてとらえたものと思われる。これについては、第五節であらためて述べる。

一〜四位と七位の分類からは、独言が、孤独な場・私的な場で、無意識に発話され、返答を期待しない性質であることが知られる。

また、五位の〈公共の場〉で発せられる独言は、次項（b）に示すように、奇異な行動として受け取られる用例でもある。換言すれば、本来は孤独な場・私的な場で発するものと考えら

れていることになる。

六位の〈会話が不成立〉は、コミュニケーションが円滑に行われない状況である。たとえば、

○彼に話しかけたつもりが、ひとりごとになってしまった。

○みんなと話していて突然話し出していると、友人に「それってひとりごと？」とよく言われる。

などがそれである。

(b) 他者の独言を聞いたとき、どう感じるか

他者の独言を聞いたとき、どう感じるかが読みとれるものは、四七例が認められる。これを心情ごとに分類したうえで、多い順に並べると次のようになる。

- | | |
|----------------|-----|
| 1、奇異である | 一三例 |
| 2、癖である | 一二例 |
| 3、耳障りである・不快である | 五例 |
| 4、寂しがつている | 四例 |
| 5、疲労している・悩んでいる | 四例 |
| 6、孤独感がある | 二例 |
| 7、暗い印象を持つ | 二例 |
| 8、その他 | 五例 |

一位の〈奇異である〉は、

○ひとりごとは周りからはおかしな人に見える。

○あの人はひとりごとばかり言っていて気味が悪い。
のような作例である。

三位の〈耳障りである・不快である〉は、

○彼女のひとりごとがうるさくて集中できない。
のような作例である。

また、八位の〈その他〉には

○ひとりごとを言いすぎると呆けるらしい。

○ひとりごとは老化の始まり。

のような作例も見られた。

一〜八位のいずれも、マイナスイメージをもって独言を聞いている。

(c) 独言を他者に聞かれたとき、どう思うか

独言を他者に聞かれたとき、あるいは、自分が独言を発したことに気づいたとき、どう思うかが読みとれるものは、三二例が認められる。これを心情ごとに分類したうえで、多い順に並べると次のようになる。

- | | |
|-------------------|-----|
| 1、聞かれては困る | |
| 〔言ってしまう〕「見つかる」を含む | |
| 2、恥ずかしい | 二〇例 |
| 3、笑われてしまう | 五例 |
| 4、自分でも寂しく悲しくなる | 二例 |

5、その他（「気まずい」）

（「あぶない」）

（「頭がおかしいと思われる」）

一例
一例
一例

ここからは、独言が、聞かれては困るものであり、それを聞かれると、羞恥の意識を持ったたり、自分への評価に不安感を持つたりすることが伺われる。

五、源氏物語の独言との相違点

さて、前節の項目（a）～（c）と源氏物語とを比較して見出される共通点・と相違点とを整理しよう。

まず、源氏物語との共通点として、次の二つがあげられる。

第一は、現代では、独言が、孤独な場・私的な場で、無意識に発話され、返答を期待しない性質であるということである。

これについて、源氏物語の用例を具体的に示そう。たとえば、第一節に掲げた用例（1）では、地の文に「えさしいらへも聞こえず」とあり、返答がなかったことが知られる。また、用例（2）では、「人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠り給へ」という地の文が見られる。これは、人に知られたくない状況での発話であることを説明したものと解釈できる。次に掲げる用例（5）でも、地の文において、「心にもあらず」という心境での発話であることが説明されている。

（5）「薰」かたみぞと見るにつけては朝露の所せきまでぬる袖かな

と、心にもあらずひとりごち給ふを聞きて、（東屋・五・一八〇・六）

現代の大学生の短文で、次のようなものは、無意識に心情を吐露する間投的発話であり、源氏物語とも共通する。

○何か失敗をして、友達がいなかったにもかかわらず「失敗したー」とひとりごとを言ってしまった。

○あまりの重圧に耐えきれず思わずひとりごちる。

共通点の第二は、独言は聞かれては困るもので、それを聞かれることに、羞恥の意識を持つことである。次の源氏物語の用例（6）では、女君は、独言を夕霧に聞かれたことを知って、恥ずかしく思い、顔を夜具に引き入れてしまっている。

（6）「女君」「雲居の雁も我ごとや」とひとりごち給ふけはひ、若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、（夕霧）

「これあけさせ給へ。小侍従やさぶらふ」との給へど、をともせず。御乳母子なりけり。ひとりごとを聞き給ける

もはづかしうて、あいなく御顔も引き入れ給へど、（少女・二・三〇一・一一）

一方、源氏物語との相違点は、次の二つである。

第一は、現代では、コミュニケーションの不成立に対してマインスマイメジを持つていたり、他者の独言に対して不快

感をいだいていることである。

和歌は、本来、やりとり（贈答）が行われる性質である。しかし、源氏物語では、返歌を期待しない（期待できない）での和歌や、和歌などの引用、間投的発話などが独言的に発話され、そこに、ヒトリゴツ・ヒトリゴトという語の使用が集中している。たとえば、第一節に掲げた用例（1）では、源氏の和歌に対して返歌がなかったことが、地の文に記されている。また、次に掲げる用例（7）では、「又起きたる人もなければ」とあり、返歌が期待されない状況下での発話であると知られる。

（7）〔源氏〕友千鳥もろ声に鳴くあか月はひとり寝さめの床
もたのもし

又起きたる人もなければ、返々ひとりごちて臥し給へり。

（須磨・二・三三八・一三三）

中古では、このように、「返答を期待しない（期待できない）」で和歌を発話することも、独言としてとらえられていた。この種の独言は、和歌の贈答に照らして変則的ではあっても、決して異常な行動ではなかったであろう。

ところが、現代の日常会話は、話しことば（談話）のやりとりで成立している。会話を成り立たせない独言を発することは、度が過ぎるとマイナスイメージを持たれることにもなる。

源氏物語との相違点の第二は、次のように、独言を論理的思考の手段のひとつとしてとらえていることである。

○自分の考えを意識せずにひとりごととして口にしてしまう
ことがあるけれど、考えをまとめる効果が高い。

○私は自分の意見をまとめる時にひとりごとを言う。

土岐（一九八三）は、この種の独言を「事柄的ひとりごと」と呼び、「視覚以外に聴覚なども含めて二重三重に刺激した方が、本人にとっては、それだけ確認の度合いが増すため、安心できるのである」（二〇一頁）と指摘している。「事柄的ひとりごと」と明らかに認定できる用例を、源氏物語に見出すことはできない。ただし、この種の言語行動が、中古には皆無であったとの断言はできない。作品の内容が「事柄的ひとりごと」の有無に関わることも考慮しなければならぬからである。しかし、源氏物語での使われ方が、現代の使われ方と相違するという事実そのものは、口語訳をするうえで看過し難い。

六、近現代の口語訳作品のヒトリゴツ

源氏物語は、近現代において、口語訳作品として出版されるようになった。ここで述べる口語訳作品とは、主として作家によるもので、口語訳そのものが文学作品としての独立性を有しているとの考えからの呼称である。以下では、近現代の作家の口語訳作品において、源氏物語の独言が、どのように訳されるかを調査したい。このことから、発話様式が「和歌」「漢詩」

「催馬楽」に偏りを見せる源氏物語の独言に対する、近現代での注意のはらわれ方を確認したい。

比較する口語訳作品⁶⁾としては、作家である与謝野晶子・谷崎潤一郎・田地主子・瀬戸内寂聴によるもの、および、言語研究者である今泉忠義⁷⁾によるものを選定した。対象箇所は、原典の「ひとりごと」「うちひとりごと」(三六箇所)に対応する箇所にとった。これは、現代の大学生による短文で、動詞の形があまり見られないことから、源氏物語での動詞の形は、別の語への置き換えが必要になると予測されたためである。

口語訳は、「ヒトリゴトが+発話動作語」⁸⁾型、「ヒトリゴトを+発話動作語」型、「ヒトリゴトに+発話動作語」型、「ヒトリゴトのように+発話動作語」型、ヒトリを副詞的に使用した「ヒトリ+発話動作語」型、ヒトリゴト・ヒトリを用いない「他の発話動作語への置き換え」型、「置き換えなし」型(ヒトリゴツのまま)、「訳出せず」型に大別できる。これに基づいて、集計結果を示したものが「表1」である。また、発話動作を示す部分ごとに並べ換えたものが「表2」である。

右の集計から読みとれる傾向をもとに、訳者別の特徴を見よう。

与謝野訳では、「他の発話動作語への置き換え」型が最多で、二四例を数える。なかでも、「口ずさむ」(一二例)が選択されることが多い。その例を(8)～(10)に示す。

(8)「いつも時雨は降りしかど」(かく袖ひづるをりはなかりき)などと口ずさんでおいでになった。(中巻・六三八頁・二行目、本文イ)⁹⁾

(9)〔和歌引用〕：

と口ずさんでいるのを聞いて(下・三三三・四、本文ロ)

(10)〔和歌引用〕：

こう口ずさみながら(中・五七四・六、本文ハ)

このほかにも、「言う・歌う・思いやられる・思われる・唱える・口にする・口に出す・口にする」への置き換えがある。

谷崎訳では、「ヒトリゴトを+発話動作語」型が最多で、二八例を数える。なかでも「ヒトリゴトを言う」(二三例)に偏りを見せ(用例(11)～(13))、口語訳が固定化する傾向が強い。

(11)「ふりしかど」と独り言を仰せになります。(巻四・二四四

頁・四行目、本文イ)

(12)〔和歌引用〕：

と、独り言を仰せになるのを聞かまして(五・一一九・一

七、本文ロ)

(13)〔和歌引用〕：

とひとりごとを言いつつ(四・一五九・二三、本文ハ)

円地訳では、谷崎訳同様の「ヒトリゴトを+発話動作語」型(二〇例)。発話動作語は、すべて「言う」が見られる(用例(14))。一方で、「ヒトリ+発話動作語」型も見られる(二二例)。なか

【表1】ヒトリゴツ・ウチヒトリゴツの口語訳 (1)

| (I) 動詞以外の部分 | (II) 動詞部分 | 身附野 | 谷 | 崎 | 円 | 地 | 瀬戸内 | 今 | 泉 | 計 |
|-------------|-----------|-----|----|----|---|---|-----|----|----|----|
| ヒトリゴツが～ | 出る | 1 | 1 | | | | | | | 2 |
| ヒトリゴツが～ | 口に出る | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリゴツが～ | 口をもれる | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリゴツを～ | 言う | 1 | 23 | 10 | | 6 | 6 | 6 | 46 | 1 |
| ヒトリゴツを～ | うなる | | | | | | | 1 | | 1 |
| ヒトリゴツを～ | する | 2 | | | | | | | | 2 |
| ヒトリゴツを～ | つぶやく | | | | | 7 | | | | 7 |
| ヒトリゴツを～ | もらす | | 5 | | | 1 | 1 | 1 | | 7 |
| ヒトリゴツに～ | 言う | | | | | | | 1 | | 1 |
| ヒトリゴツに～ | うなる | | | | | | | 15 | | 15 |
| ヒトリゴツに～ | 口ずさむ | | | | 1 | 2 | 3 | | | 6 |
| ヒトリゴツに～ | もらす | | | | | | 1 | | | 1 |
| ヒトリゴツも～ | する | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツも～ | 口から出る | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | 言う | 4 | 1 | 4 | | | | 1 | 10 | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | うたう | | 1 | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | うなる | | | | | | | 3 | | 3 |
| ヒトリゴツのように～ | 口ずさむ | | 1 | | | | 2 | | | 3 |
| ヒトリゴツのように～ | 騒じる | | 1 | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | つぶやく | | 1 | | | | 5 | 3 | | 9 |
| ヒトリゴツのように～ | 口に出る | | | | | | | 1 | | 1 |
| ヒトリ～ | うたう | | | | 1 | | 1 | | | 2 |
| ヒトリ～ | かこつ | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリ～ | 口ずさむ | | 1 | | | 7 | 9 | | | 17 |
| ヒトリ～ | つぶやく | | | | 2 | 1 | | | | 3 |
| 他の動詞への置き換え | 言う | 4 | 1 | | | | | | | 5 |
| 他の動詞への置き換え | うたう | 2 | | | | | | | | 2 |
| 他の動詞への置き換え | 思いやられる | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 思われる | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口ずさむ | 12 | | | | 5 | | 1 | 18 | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 喝える | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口にする | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口に出す | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口による | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 繰り返しも出る | | | | | 1 | | | | 1 |
| 置き換えなし | ヒトリゴツ | | | | 2 | | | | | 2 |
| 置き換えなし | ヒトリゴツスル | 2 | | | | | | | | 2 |
| 訳出せず | --- | | | | | | 1 | | | 1 |

でも、「ひとり口ずさむ」が七例見られる(用例(15))。さらに、置き換えのない「ヒトリゴツ」(二例)も見られる(用例(16))。

(14)〔和歌引用〕…

とひとりごとをおっしゃるのを聞いて(五・一〇五・一二、本文ロ)

【表2】ヒトリゴツ・ウチヒトリゴツの口語訳 (2)

| (I) 動詞以外の部分 | (II) 動詞部分 | 身附野 | 谷 | 崎 | 円 | 地 | 瀬戸内 | 今 | 泉 | 計 |
|-------------|-----------|-----|----|----|---|---|-----|----|----|----|
| 訳出せず | --- | | | | | | 1 | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | うたう | | 1 | | | | | | | 1 |
| ヒトリ～ | うたう | | | | 1 | | 1 | | | 2 |
| 他の動詞への置き換え | うたう | 2 | | | | | | | | 2 |
| ヒトリゴツを～ | うなる | | | | | | | 1 | | 1 |
| ヒトリゴツに～ | うなる | | | | | | | 15 | | 15 |
| ヒトリゴツのように～ | うなる | | | | | | | 3 | | 3 |
| ヒトリ～ | かこつ | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリゴツを～ | する | 2 | | | | | | | | 2 |
| ヒトリゴツも～ | する | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツを～ | つぶやく | | | | | | 7 | | | 7 |
| ヒトリゴツのように～ | つぶやく | | 1 | | | | 6 | 3 | | 9 |
| ヒトリ～ | つぶやく | | | | 2 | 1 | | | | 3 |
| 置き換えなし | ヒトリゴツ | | | | 2 | | | | | 2 |
| 置き換えなし | ヒトリゴツスル | 2 | | | | | | | | 2 |
| ヒトリゴツを～ | もらす | | 6 | | | | 1 | 1 | | 7 |
| ヒトリゴツに～ | もらす | | | | | | 1 | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 繰り返しも出る | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリゴツを～ | 言う | 1 | 23 | 10 | | 6 | 6 | 6 | 46 | 1 |
| ヒトリゴツに～ | 言う | | | | | | | 1 | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | 言う | 4 | 1 | 4 | | | | 1 | 10 | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 言う | 4 | 1 | 4 | | | | | | 5 |
| ヒトリゴツも～ | 口から出る | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツに～ | 口ずさむ | | | | 1 | | 2 | 3 | | 6 |
| ヒトリゴツのように～ | 口ずさむ | | 1 | | | | | | | 3 |
| ヒトリ～ | 口ずさむ | | 1 | 7 | | 9 | | | | 17 |
| 他の動詞への置き換え | 口ずさむ | 12 | | | | 5 | | 1 | 18 | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口にする | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口に出す | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツが～ | 口に出る | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | 口に出る | | | | | | | 1 | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 口による | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツが～ | 口をもれる | | | | 1 | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 思いやられる | 1 | | | | | | | | 1 |
| 他の動詞への置き換え | 思われる | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツが～ | 出る | 1 | 1 | | | | | | | 2 |
| 他の動詞への置き換え | 喝える | 1 | | | | | | | | 1 |
| ヒトリゴツのように～ | 騒じる | | 1 | | | | | | | 1 |

(15)「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひづる折はなかりき」という古歌をひとり口ずさんでおいでになる。(巻四・二三八頁・三行目、本文イ)

(16)〔和歌引用〕…

とひとりごちながら(四・一四八・一、本文ハ)

瀬戸内訳は、「ヒトリゴトを+発話動作語」型(二四例)、が最多である。なかでも「ヒトリゴトをつぶやく」が七例(用例(17))、「ヒトリゴトを言う」が六例見られる(用例(18))。次いで多いのが、「ヒトリ+発話動作語」型(二一例)で、このうち「ひとり口ずさむ」が九例見られる(用例(19))。「ヒトリゴトを+発話動作語」型に偏りを見せない傾向は、円地訳と共通している。

(17)〔和歌引用〕：

とひとりごとをつぶやかれるのをお聞きして(巻九・一二

三頁・三行目、本文ロ)

(18)〔和歌引用〕：

とひとりごとを言いながら(七・一六四・七、本文ハ)

(19)〈神無月いつも時雨は降りしかど〉という古歌を独り口

ずさんで(七・二五七・七、本文イ)

今泉訳では、「ヒトリゴトに+発話動作語」型(一九例)、とりわけ「ヒトリゴトに唸る」(一五例)を選択することが多い(用例(20)(21))。ほかに「ヒトリゴトを言う」(六箇所)も選択されている(用例(22))。

(20)「時雨は降りしかど(こんなにまで袖を濡らすことはな

かった)」と独りごとを唸っていらっしやる。(二五卷・四

〇頁・九行目、本文イ)

(21)〔和歌引用《現代語訳》〕

と、独りごとにお唸りになり(二四・八二・八、本文ハ)

(22)〔和歌引用《現代語訳》〕

と独りごとをおっしやるのを聞いて(二八・一一六・一二、本文ロ)

今泉訳の「ヒトリゴトに+発話動作語」型は、原典の「ヒトリゴツ」を生かすとともに、発話動作語「唸る」によって発話様式の違いを示している。「ひとりごと」という副詞的な使われ方が馴染みのある表現であるか否かは別として、言語研究者の立場からの工夫が見られる。

以上、与謝野訳の「他の発話動作語への置き換え」型、円地訳・瀬戸内訳の「ヒトリ+発話動作語」型や一つの型に偏らないこと、今泉訳の「ヒトリゴトに+発話動作語」型などが見られることなどは、源氏物語のヒトリゴツ・ウチヒトリゴツが、近現代語の語感そのままではないことを示唆している。語感の違いは、源氏物語の発話様式(和歌などであること)が、近現代に見られないものであることに起因するであろう。

まとめ

第一節では、源氏物語を中心とする中古和文の独言が、和歌・漢詩・催馬楽などの発話様式に集中し、返歌(返答)を期待していない性質のものであることの概略を示した。

第二節～第四節では、現代の大学生による短文・語義記述から知ることのできる傾向を確認した。

第五節では、第二節～第四節で知ることのできた傾向と、中古和文での傾向を比較した。

中古和文との共通点は、次のことであった。

A、独言は、孤独な場・私的な場で、無意識に発話され、返

答を期待しない性質と認識されていること。

B、独言は、聞かれては困るものであり、それを聞かれてしまふことに対して、羞恥の意識を持つこと。

また、中古和文との相違点は、次のことであった。

C、現代では、独言によるコミュニケーションの不成立に対して、マイナスイメージを持つていること。また、他者の独言に対して不快感をいだくこと。

D、現代では、論理的思考手段のひとつとしてとらえること。

第六節では、源氏物語の近現代の口語訳作品において、ヒトリゴツを「他の発話動作語への置き換え」型、「ヒトリ+発話動作語」型、「ヒトリゴトに+発話動作語」型などへ置き換える傾向が確認された。

中古と現代との独言で異なるのは、発話様式である。これは、言語生活の違いに起因し、語の意味には大きな変化をもたらしていない。しかし、近現代の口語訳作品で、右のような傾向が見られることは、言語生活の違いに対する違和感のあらわれと

も解釈できる。その言語生活の違いを意識した口語訳をする場合、〈単独であること〉を明示し、現代語での認識しなおした発話動作語に置き換えることが必要になる。その点で、「ヒトリ+発話動作語」型などが有効であると思われる。

【注】

(1) 「発話様式」とは、会話文・和歌・漢詩・催馬楽などの「言語の媒介手段」のことを指す。ひとつの作品の内部でも、地の文・会話文・内心文・和歌・漢詩・催馬楽などの媒介手段の違いによる文体（表現の様式）があり、それらが切り替えられていると考えられる。ここでは、地の文以外の、発話されたものにおける様式の違いを問題し、「発話様式」という用語を用いる。

(2) 「間投的」とは、土岐（一九八三）の「間投的ひとりごと」という用語に基づく。「間投的ひとりごと」とは、土岐によると、自分以外の人への伝達意図がない「ひとりごと」のうち、「ある瞬間に感じたことを率直に、直接的なことばで発する」（二〇〇頁）ものであるという。本稿の「間投的発話」は、山田（一九〇八）の喚体句に近いものを想定している。

(3) 源氏物語の引用は、大島本（浮舟のみ明融本）を底本とする新日本古典文学大系「源氏物語一～五」（一九九三～九七年・岩波書店）の翻刻本文に基づいた。ただし、傍線部は「ひとりごと」「ひとりごと」のよなひらがな書きに統一した。また、発話者等を「」内に補った。

(4) 調査は、跡見学園女子大学で、平成一四年度に国語史を受講している国文学科の三、四年生の協力を得て行った。なお、大学の性格上、回答者はすべて女性である。

(5) 訳者の目的意識の違いは、遠藤(一九九二、一九九三)でも指摘されている。遠藤論文は、学者(玉上琢彌・今泉忠義)と、作家(与謝野晶子・谷崎潤一郎・円地文子)との訳本について、謙譲語の面から比較したもので、作家の訳本には、現代語的ではない謙譲語は訳出されないという傾向を見出している。

(6) 調査に用いた口語訳作品のテキストは、以下である。

◇与謝野晶子 (角川文庫)『全訳源氏物語』上・中・下、角川書店(一九七二)

◇谷崎潤一郎 (中公文庫)『潤一郎訳源氏物語』巻一〜五(改版)、中央公論新社(一九九二)

◇円地文子 (新潮文庫)『源氏物語』巻一〜五、新潮社(一九八〇)

◇瀬戸内寂聴 『源氏物語』巻一〜十、講談社(一九九七)

◇今泉忠義 (講談社学術文庫)『源氏物語全現代語訳』(一)〜(二)十、講談社(一九七八)

(7) 言語研究者・今泉忠義の口語訳は、「できるだけ原文に即した現代語訳をと務めた」(二巻・はしがき)とあるように、作家とは異なる立場から成されている。しかし、たんなる逐語訳に留まらない文体を持つものとして、調査の対象に含めた。

(8) 「発話動作語」とは、発話する動作を表す語という意味の齋藤による造語である。「言う」などの動詞以外にも、「口に出る」などの連語をも含んでいる。

(9) 口語訳の用例(8)の(22)の源氏物語本文は、次のいずれかである。

(イ) 神無月には、大方も時雨がちなる比、いとどながめ給て、夕暮れの空のけしきも、えも言はぬ心ほそさに、「降りしかど」とひとりごちおはす。(幻・四・二〇三・四)

(ロ) 「源氏」やどりきと思ひ出せずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし

とひとりごち給を聞きて、(宿木・五・九二・一一)

(ハ) 「夕霧」見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿もる秋の夜の月とひとりごちつつ、殿におはしても、月を見つつ、心はそらにあ

くがれ給へり。(夕霧・四・一三〇・七)

【参考文献】

遠藤潤一(一九九二) 「源氏物語現代語訳本の謙譲語について」(浮舟の巻の例)、『東横国文』第二四号、東横学園女子短期大学国文学会

遠藤潤一(一九九三) 「続・源氏物語現代語訳本の謙譲語について」『東横国文』第二四号、東横学園女子短期大学国文学会

齋藤達哉(二〇〇三) 「中古の独言―発話様式からの考察―」『国語研究』第六六号、國學院大學国語研究会

土岐哲(一九八三) 「ひとりごと」『講座日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房

山田孝雄(一九〇八) 『日本文法論』(宝文館)